様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　10　日現在

機関番号：11501
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520005
研究課題名（和文）　画像の意味論に関する哲学的研究

研究課題名（英文）　Philosophical Investigation on the Semantics of Pictures

研究代表者
清塚　邦彦（KIYOZUKA KUNIHIKO）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：40292396

研究成果の概要（和文）：本研究では、画像の記号作用に貢献する次の三つの要因について検討を行った。（１）画像と対象とのあいだの（あるいは画像を見る経験と対象を見る経験のあいだの）類似関係、（２）画像を見る経験における想像の役割、（３）画像に対するわれわれの感情的反応と、画像の内容に対するその関係。以上に加えて、本研究では、記号作用の基盤となる画像の存在論的身分について、予備的な検討を行った。

研究成果の概要（英文）：In this study I examined the following three factors which contribute to the semantic functions of pictures: (1) Resemblance relations between pictures and the things depicted; (2) The role of imaginations involved in the experience of seeing pictures; (3) Emotional responses to pictures and their relation to the content of pictures. Along with them I conducted preliminary investigations into the ontological status of pictures which form the basis of their semantic functions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150.000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学倫理学
キーワード：哲学原論・各論

１．研究開始当初の背景

画像の記号作用については哲学、美学、心理学、記号論の各分野において、個別には多くの興味深い先行研究が存在するが、それらは断片的、散発的にとどまる恨みがある。哲学分野で言えば、この関連の先行業績が最も充実しているのは分析美学の領域においてである。そこでは、美術史家Ｅ・Ｈ・ゴンブリッチの著作（*Art and Illusion*, 1960）を呼び水として、ビアズリー、グッドマン、ウォルハイムをはじめとする有力な論者によって絵の描写・再現の働きや表現・表出の働きについての分析が提案され、盛んな論議が交わされてきた（M.Beardsley,*Aesthetics*,(2nd ed, 1980), N.Goodman, *Languages of Art* (2nd ed,,1974), R.Wollheim, *Art and its Objects* (2nd ed.,1980), F.Schier, *Deeper into Pictures* (1986), K.L.Walton, *Mimesis as*

Makebelieve (1990),G.Currie, *Image and Mind* (1995), D.Lopes, *Understanding pictures* (1996) ほか)。ただし、これら一連の議論が全体としてどのような成果をもたらしたかについて、現時点では安定的な評価の枠組みが形成されていない。本研究は、まずは分析美学におけるこの関連の研究状況について丁寧な総括を行うことを通じて、得られた成果の確認と今後の検討課題の明確化をめざすものである。

２．研究の目的

本研究は、哲学的な記号論の一環として、動画・静止画を含めた画像全般に関して、意味論的考察を展開するものである。

画像を対象とした意味論的研究がまずもって直面する基本的障害は、画像の場合には、（ピクトグラムのような多分に言語化された画像の場合を別とすれば､）言語の場合の単語や文字に相当する要素記号が存在しないことである。要素記号の種類やその結合様式を定めるのが文法だとすれば、画像には文法は存在しない。また、要素記号の意味からどのようにして文に類する複合的な記号の意味が決定されるかを明らかにするのが意味論だとすれば、画像には意味論もないと考えられる。

とはいえ、言語の場合と類比的な意味での文法や意味論がなくとも、われわれは、絵を見れば、そこにどのような事物が（あるいは人物や風景等が）描き出されているかを見てとることができるし、さらには、そこに描き出された人物や事物が喚起する感情や、それを取り巻く情景が湛えている雰囲気や気分を、感じ取ることもできる。われわれが絵を見ることで理解し、また感じ取るこれらの事柄は（少なくともその多くの部分は)、絵が担う「内容」とみなされてしかるべきだと考えられる。本研究において「画像の意味論」と称するのは、絵がこのような「内容」を担うことがいかにして可能か、また絵が担いうる「内容」にはどのようなものがあるかについての、一連の原理的な考察である。

より具体的には、本研究では、画像に見られる多様な記号作用のなかから、絵が目に見える事物の姿を再現・描写する（represent）働き、また絵が直接には目に見えない感情や気分・雰囲気を表出・表現する（express）働きに焦点を絞る。それらの働きをめぐる分析美学における一連の先行研究について批判的な総括を行い、分析のさらなる進展のための見通しを明らかにすることが本研究の目的である。

３．研究の方法

画像の意味論に関する研究をさらに進展させるための手がかりとして今回の研究において着目するのは次の三つのテーマである。

（１）類似説を新たな形で復権させようとする近年の議論（Ｃ・ピーコック、Ｒ・ホプキンス等）の検討を通じ、絵による描写・再現の働きにおいて対象との類似関係がどのような役割を演ずるのかという点を明確化すること。(そこには、分析美学において主流的であった類似説への否定的な評価の是非の再検討が含まれる。)

（２）ウォルハイムとウォルトンのあいだの論争をてがかりとして、画像知覚の二面性についての分析を深めること。それは同時に、絵を見る経験において想像の働きがどのような形態を帯び、どのような役割を演じるかについての踏み込んだ検討作業を意味する。

（３）絵による表現・表出の問題の検討。この点について、今回は特に、受け手の側の反応という点に注目し、それがどのような形で画像の内容に貢献するかの検討に力点を置く。

今回の研究においてもっとも重要視しているのは（２）であるが、それに取り組むための準備として、初年度においてはまず（１）にかかわる検討作業に取り組む予定である。

４．研究成果

（１）類似説（resemblance theory）の再検討。

画像による描写・再現（representation）の働きを対象との類似性に基づいて理解しようとする見方は、長い伝統を持ちながら、現代の分析美学においてはむしろ傍流であった。今回の研究では、類似説の復権を目指す近年の動向に注目し、とりわけ C.Peacocke, "Depiction"(1987); R.Hopkins, *Picture, Image and Experience*(1998); J.Hyman, *The Objective Eye*(2006); J.Gaiger, *Aesthetics and Painting*(2008)等を手掛かりに検討を行った。そこからの成果として間違いなく言えそうなのは、描写機能の理解と関連する類似関係が決して一様ではなく、少なくとも次のようないくつかの異なる視点を区別する必要があることである

① 物理的な事物としての画像と対象とのあいだの類似性、
② 画像が提示する像と対象の類似性、
③ 絵を見る経験と対象を見る経験の類似性

分析美学における類似説批判は、①のレベルでの類似性概念の問題点を指摘するのが通例であった（代表としてはグッドマン、ウォルハイム等)。しかし、その批判は、②や③のレベルでの類似性の存在をいささかも否定するものではない。実際また、①の意味での類似性を否定する論者の議論の中には、②や③の意味での類似性の存在を認め、それが

絵の描写機能に積極的に貢献することを認める部分も見受けられる。こうしたやや複雑な理論的検討状況については、詳しい成果報告は後日を期することとなった。

（２）画像を見る経験における想像のあり方。

画像を見るとは、通常の絵画作品の場合ならば、ある平面上の物体を見ることであると同時に、そこにあたかも一定の空間的な広がりを見ているかのような想像体験を味わうことである。こうした事情は分析美学においてはしばしば絵画知覚の「二面性」と呼ばれるが、そこにおいて知覚と想像がどのような形で働いているかについては論者により大きく見方が分かれる。本研究では、K.L.Walton のごっこ遊び理論に依拠しつつ、Walton ”Experiencing Still Photographs” 等を手がかりに画像知覚における想像の役割と形態について検討を行った。そこから明らかになってきたのは、いわゆる静止画像が物理的な事物として静止しているという事実と、そのもとにわれわれが見る描写内容の側の運動状態とが、単純には連動しないという点の重要性である。

レッシングの『ラオコーン』以来、時間芸術としての文学と対比して、絵画を空間芸術とする見方が繰り返し唱えられてきた。その際、並列的な記号としての絵画はある一時点における諸事物の並列的な配置を表現するのが本来の機能だと見なされるため、絵画がどこまで運動や時間的変化全般を表現できるかについては、否定的・限定的な見方が多かったように見受けられる。通常の絵画は（避けがたい経年劣化を別とすれば）時間的に変化するものではないという事情が、絵による時間的変化の表現への障害になると考えられてきたわけである。しかし、そのような考察のなかで「絵画」が何を指しているのかは、さほど明らかではない。たしかに、物理的な対象としての絵画は、経年劣化を別とすれば時間的に変化しないかもしれない。しかし、そのことは、絵が描き出している内容の内に時間的変化が含まれていないことを、決して含意するものではない。それどころか、画家は（あるいは漫画家や挿絵画家は）いろいろな技法を駆使して運動や時間変化を静止的な絵画のなかで表現してきたのでもある。その点を考慮に入れれば、時間的変化の描写という点についての絵画の表現能力の限界論には、物理的対象としての絵画と、その描写内容のレベルとの混同が介在している公算が高い。こうした混同を徹底して排除した場合に、（スチール）画像による運動の描写についてどのような全般的展望が得られるか。この点については、本研究では問題の所在を確認した段階であり、より踏み込んだ検討と成果の発表は今後の課題として残された。

（３）画像の存在論に関する研究。

上記（１）と（２）の線に沿って画像の分析を進める中で、そもそも画像とはどのような対象であるかについて、基本理解を明確化しておく必要性がますます明らかになった。そのことを受けて、本研究では、中盤以後、分析美学において芸術作品の存在論をめぐって行われてきた一連の先行研究について、再検討を行うこととなった。

作品存在をめぐる分析美学での論議の基本枠を形成しているのは、１９６０年代に提唱されたウォルハイムとグッドマンの理論である。ウォルハイム（*Art and Its Object*, 1968）は、芸術作品全般を、絵画や非鋳像彫刻に代表される個体的な作品と、音楽学や文学に代表されるタイプ的な作品とに区分し、それぞれの特徴について準備的な考察を提示した。他方のグッドマンは、これと部分的には重なるが完全には一致しない自筆的な作品／他筆的な作品という区分を提唱した。自筆的な作品を代表するのは絵画や非鋳像彫刻のような個別的な作品だが、それらを統一する基本特徴としてグッドマンが重視するのは、それらの同一性にとってその制作経緯が重要だという点であり、それゆえにまた贋作可能だという事実である。他方、音楽や文学の場合には、表記法によって特定される抽象的な型が重視されるため、その型に適う限り、すべての演奏やコピーは同等な作品事例となる。個々の事例の制作経緯は、作品事例としての真正さにとって重要ではない。これらが他筆的作品である。

分析美学においては、こうした相異なる二元論を軸としつつ、その相互関係やそれぞれの問題点の指摘、ならびにそれらにかわる一元化の見通しの提案（Ｆ・シブリー、Ｇ・カリー、Ｄ・デイヴィス等）という形で論議が展開されてきた。その辺りの問題状況について非常におおまかな見取り図の作成を試みたのが、共著本『これが応用哲学だ！』に所収の拙論である。とはいえ、検討は続行中であり、より詳細な検討結果の発表には他日を期することとしたい。

（４）画像における感情の表出・表現に関する分析。

本研究では、画像による表現・表出の問題について分析するための準備作業として、画像に限定せず、虚構的な内容をもった作品全般を視野に入れた形で、受け手側の感情的反応の問題をめぐる分析美学における検討状況の確認を行った。この問題は通例、次の三つの常識的命題から生じるパラドックス（「フィクションのパラドックス」）の形で提起される。

(a) われわれは、フィクションに登場する人物や出来事に関しても感情的反応を持つ。
(b)ある人物や出来事に関して感情的反応を持つためには、その人物や出来事の実在を信じていることが不可欠である。
(c)われわれは、フィクションに登場する人物や出来事はかならずしも実在しないと考えている。

パラドックスを回避するにはこのうちの少なくとも一つを放棄ないし修正する必要がある。拙論「実在しない事柄をよろこび、かなしむこと」では、上記の(a)～(c)のそれぞれを否定した代表例としてウォルトン、ラマーク、キヴィの議論を取り上げて批判的に論評した。拙論では、それぞれの議論について問題点の指摘を行ったが、同時に明らかになったのは、どの議論にも全面的には否定しがたい貴重な洞察が含まれていることである。このことが示唆しているのは、フィクションのパラドックスの解決が、たんに上記 (a)～(c)のどれか一つを否定・修正するだけでは不十分であり、むしろ、すべての命題にわたる包括的な見直しを必要としているという事情である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 清塚邦彦、フィクションの統語論をめぐって、『哲学の探究』（哲学若手研究者フォーラム）、査読なし、37 巻、2010 年、5-17 頁。
② 清塚邦彦、実在しない事柄をよろこび、かなしむこと、『思索』（東北大学哲学研究会）、査読なし、45 巻 1 号、2012 年、85-108 頁。

〔図書〕（計２件）
① （共著）戸田山和久・美濃正・出口康夫編『これが応用哲学だ！』、大隅書店、査読なし、2012 年、187-196 頁［清塚邦彦「芸術作品とはどのような対象なのか？」］。
② （共著）澤田治美編『ひつじ意味論講座６意味とコンテクスト』、ひつじ書房、査読なし、2012 年、63-79 頁［清塚邦彦「意味と含み」］。

６．研究組織
(1)研究代表者
清塚　邦彦（KIYOZUKA KUNIHIKO）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：40292396